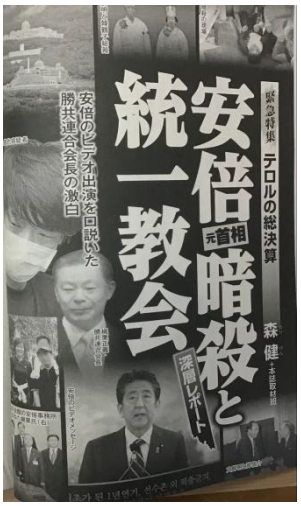
安倍元首相と旧統一教会

写真は『文藝春秋』９月号の緊急特集レポート。安倍元首相と旧統一教会との親密な関係が、勝共連合会長の激白などにより詳しく綴られている。旧統一教会と政治家、とりわけ自民党議員との関係が問題になっているが、安倍元首相と教団のかかわりが注目されている。朝日の「天声人語」９月２日と１日社説を紹介する。



点検と調査は似ているようでかなり違う。「エレベーターの点検」は日常的に見られる風景だが、「エレベーターの調査」となれば何か事故が発生したかと思うだろう。旧統一協会に関して自民党が手がけているのは、あくまで点検だそうだ▼記者会見した茂木敏充幹事長は、質問で「調査」の言葉が出ると「調査ではありません」とわざわざ訂正していた。問題を小さく見せようとしているのか。「議員それぞれが点検を」と言っておけば、その対象は生きている議員だけになる▼

亡くなった安倍元首相については、教団の票を差配したという証言まで出ているのに、完全に素通りである。たとえて言えば、ガス漏れしているのに緩んだガス栓のことは脇に置き、「ガス臭くないですか」と聞いて回るようなものだ▼本気で調べ始めれば、安倍氏を支持してきた保守層を敵に回してしまう。そして何より、今月 27 日に予定する国葬への反対論がさらに高まると心配しているのだろう。国葬という形式にこだわったために、おかしなことになっている▼旧統一協会との関係を洗い出したからといって、安倍氏の足跡が無に帰すわけではなかろう。首相在任中、景気を良くしようと努めたことは評価したいと思う。一方で森友や加計の問題では、社会の倫理を蝕むような振る舞いが目に余った▼故人を悼むというのは、功罪をあいまいにすることではなく、きちんと受け止めつつ、静かに見送ることだろう。どんな人の場合でも同じである。

社説から―（岸田首相は８月 31 日の記者会見で）教団に対しては、「党の方針として関係を断つよう、所属国会議員に徹底する」と述べ、遅ればせながら、党が前面に出る考えを示した。ただ、これまでの長く深いつながりを考えれば、号令ひとつで片がつくとは思えない。何より、過去の徹底した検証と、真摯な反省が前提になければならない。

その点、不可欠なのが、国政選挙時を含めた、安倍氏と教団のかかわりの解明だ。首相は「ご本人が亡くなられた今、十分な把握には限界がある」と述べたが、端から逃げ腰では、首相の言う「政治への信頼回復」などおぼつかない。安倍政権下での教団の名称変更の経緯もつまびらかにされねばならない。

（2022年９月５日）